

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530629

研究課題名(和文) 比較近代社会論の成立過程 後発資本主義の「精神」をめぐる独日の知的苦闘

研究課題名(英文) The birth of the comparable study on modern society: Struggle for the morality in late developed capitalism in Germany and Japan

研究代表者

野崎 敏郎 (Nozaki, Toshiro)

佛教大学・社会学部・教授

研究者番号：40253364

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：資本主義国における国民精神には、精神が資本主義を育成・促進するという側面と、資本主義によって精神が規制されるという側面とがある。マックス・ヴェーバーは、禁欲的プロテスタンティズムにおける前者の側面を、カール・ラートゲンは日本近代における後者の側面を考究した。ハイデルベルク大学で協力関係にあった二人は、互いに刺激しあいながら、資本主義と精神との相剋を掘りさげ、また第一次世界大戦敗戦後のドイツにおける国民精神の再生の途を探った。同様に、渋沢栄一も、日本において商業道徳を根づかせ、健全な国民精神の確立をめざした。

研究成果の概要(英文)：National spirit in a capitalistic state has two aspects: spirit promotes the capitalism, and capitalism regulates the spirit. Max Weber inquired into the former aspect through the study of ascetic protestantism, and Karl Rathgen investigated the latter aspect in the modern Japan. They learned from each other and wished to reconstruct the national spirit of Germany after the First World War. Similarly Eiichi Shibusawa hoped to establish commercial morality and sound national spirit in Japan.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：比較歴史社会学 国民精神 後発資本主義 ヴェーバー ラートゲン 渋沢栄一

1. 研究開始当初の背景

(1) 独日の研究系譜解明の立ち後れ

ラートゲン、ヴェーバー、プレントナーらの資本主義社会論と、戦前日本における資本主義精神研究とは、理論的に接続しているのみならず、人脈的な繋がりをも有しているが、その人脈実態はあまり知られていない。ドイツ人研究者と日本人研究者との理論的継承関係と人脈的系譜とを解明することは重要な考究課題だが、とくにその関係をしめす関係史料の発掘はすすんでいない。

(2) 戦前の研究成果の再評価について

後発資本主義国における近代精神形成の問題にかんして、戦前独日の研究は豊かな成果を刻んでいる。この研究の発端となったのは、ラートゲンの『日本の国民経済と国家財政』(1891)、福田徳三の『日本経済史論』(独文、1900)、およびヴェーバーの著名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(以下『倫理と精神』と略記、初出1904-05)、『ヒンドゥー教と仏教』(初出1916-17)である。これ以後、ドイツではヴェーバーの立論にかんする大論争が生じ、日本においては、河田嗣郎『資本主義的精神』(1910)、円谷弘『我国資本家階級の発達と資本主義的精神』(1920)等の重要著作が現れ、さらに、羽仁五郎『東洋に於ける資本主義の形成』(1932)、島恭彦『東洋社会と西欧思想』(1941)、内藤莞爾『宗教と経済倫理』(日本社会学会編『社会学』第8輯、1941)へと連なる。また戦中から戦後初期にかけての知的苦闘の成果をしめすのが、大塚久雄『著作集第8巻』に収録された一連の論稿、川島武宜『日本社会の家族的構成』(1948)、丸山真男『現代政治の思想と行動』(1956)等である。これらを再評価しつつ、併せて、これらの立論と、渋沢栄一らの実業界における実践活動とを関連づけていくことが重要な考究課題となる。

2. 研究の目的

戦前の独日の論者たちの相互関係(継受と相互批判)を解明し、彼らの業績を再評価し、戦前期の研究成果を着実に継承することは、今日、日本人の精神性と経済発展との関連を精密に究明するために不可欠かつきわめて重要である。そこで本研究は、第一に、未公開史料の発掘によって、独日における資本主義精神研究の理論的・人脈的系譜を明らかにする。第二に、ドイツにおいては、とりわけ研究が遅れているラートゲンの若き日の事績を発掘し、彼がどのような問題意識をもってドイツおよび日本の経済・社会にかんする考究へとすすんでいったのかを解明する。日本においては、

とりわけ渋沢栄一の歩みを再評価し、彼の思想と行動を、戦前期の研究成果と関連づけながら、その今日的意義を明らかにする。第三に、資本主義精神論応用の方法的視座を確立するとともに、日本人の精神性にかんする近年の諸研究を批判的に検討し、ひろく国民精神研究、比較近代社会論、および日本近代社会研究の豊富化を図る。

3. 研究の方法

本研究の方法は、歴史的事実である。独日の研究者たちにかんして、第一次史料を発掘したうえで、彼らの理論形成事情を成立史的かつ実証的に究明することは、従来ほとんどなされていなかった。これにたいして、本研究においては、日本語の史料のみならずドイツ語の第一次史料も駆使し、高度な実証性を備える。またラートゲンの子孫等への聞き取り調査も実施し、子孫への伝承情報をも考証のために援用する。

4. 研究成果

(1) マックス・ヴェーバーの「資本主義の『精神』」論の意義について

ヴェーバーは、「資本主義の『精神』」の性格づけと、自分の論述中のその位置づけとを、とくにラッハファールへの反批判において明示している。「私の詳論 [= 『倫理と精神』] にあっては、近代資本主義の揺籃期に存在し、多くの他の力とともに 共同で資本主義の建設に当たった生活様式のある特定の構成要素を分析し、その変化と消滅とを跡づけることが問題であった」。かかる試論は、「一回限りの発展に特徴的なものを突きとめなくてはならない」のであり、そこで問題となるのは、あくまでも「ひとつの個別的構成要素だと表されている宗教的諸契機」である。この論題に関係するのが、「あらゆる時代においてかかる経済体制 [= 資本主義体制] に共通しているものすべてなのか、それともこうした種類の特定の歴史的体制の独自色なのか」と問うならば、それは「後者のみ」である。「私が特別に分析した近代資本主義の『精神』のあの構成要素 『職業義務』の思想と、この思想につきまといっているすべての事柄 は、結局、(表現の一般的な意味における) 資本主義の『精神』が担っている経済行為の内部では、またしても特定の歴史的一断面においてのみみられるのであり、他方で、この構成要素は、経済的なものの領域を越えて、人間行動のまったく異質な領域に入りこんでいる」(Winckelmann 1968c: 169, 171, 173)。ここにみるように、資本主義の「精神」が、歴史の特定の断面においてのみ、また特定の地域にのみ局限されて《創出》されえたのにたいして、それが後発諸国へと《伝播・波及》していく過程に

においては、きわめてグローバルな展開をみせるといのが、彼の立論の要諦である。

(2) マックス・ヴェーバーの「資本主義の『精神』」論とアジア論の射程について

《創出》と《伝播・波及》とを峻別するヴェーバーのこの立論は、まず『倫理と精神』において《創出》論として提示され、その後、『ヒンドゥー教と仏教』において、《伝播・波及》の偏差の要因分析がなされる。直接日本を論じたなかで、ヴェーバーは次のように論じている。

「レーエン階層制においては、なによりも、この両者〔騎乗勤務の騎士とミニステリアーレン〕の間にひとつの断絶が存在していた。徒歩で勤務する家臣（下士 *kasi*）はたんなるミニステリアーレンであり、彼らはしばしば役所勤務に従事した。侍のみが武器所持〔帯刀〕資格をもち、また受封資格をもち、そういうものとして、農民から、また封建的なしかたで農民よりもなお低い位階に置かれていた商人や手工業者から、厳格に区別されていた。彼ら〔騎士身分の侍〕は自由人であった。世襲レーエン（藩 *han*）は、いっばうでは剥奪することが可能であり〔改易〕、フェロニー〔封建法上の忠誠義務違反〕または重大な失政を理由として、レーエン法廷〔幕閣〕の判決によって没収された。また下級レーエンへの移し替え〔転封（減封）〕もここで処断されえた。このことと、またとりわけ、提供されるべき戦士数の規定のために、伝統的に戦士たちに帰せられた年貢米の高（「石高 *Kokudaka*」）これはまた年貢米の保有者の位階をも規定したにしたがってレーエンの査定登録〔蔵入地と給地の配分決定〕が施行されたことによって、日本のレーエンは、とくにインドにみられるような、あの典型的アジア的軍事プフリュンデに接近する。しかしながら、（伝統的名譽贈与物とならんで）人的誠実義務と従軍義務が決定的なものである。位階を年貢米の高にしたがって定め、しかも誰かを大名に数えいれるべきか否かをもち年貢米の高にしたがって決定されるべきだとする見地は、当然にも、原初的氏姓カリスマ的見地の完全な逆転。この逆転は他のケースでも時には生じていたことであろうである。原初的氏姓カリスマ的見地にしたがうと、〔年貢米の高ではなく〕ジッペの伝承位階が、授封されるべき官職位階および伝統的にそれと結びつけられている諸権能にたいする要求権を授けたのである。「封臣とミニステリアーレンとの下層階級 侍と下士 *kasi* が日本にとって典型的な層をなしていた。緊張度の高いつまり純封建的な 名譽觀念と封臣的誠実とが中核的な感情をなして、いっさいは すくなくとも書物に書かれた理論においては 結局はこの中核的感情を

軸として動いていた。実生活においては、禄米がこれらの階級の物質的給養の典型的な形式であった。「重要な要件にさいして、各主君は封臣総会を召集した。かかる侍の集會こそが、割拠する藩（Teilfürstentum）のいくつかににおいて、前世紀 60 年代の大危機のなかで、軍の近代的形態への移行を決定したものであり、幕藩制（Shogunate）の転覆へといったあの政策への方向をそもそも決定したものである。〔王政〕復古のその後の推移は、やがて たんに軍のみならず、国家公務においても レーエン制的行政に代えて官僚制的行政の導入へといたり、またレーエン権の解体へといった。このレーエン権の解体は、侍階級の広範な層を小レントエ生活的中産身分に変化させ、また部分的にはすっかり無産者に変化させた。旧い封建時代の高い名譽概念は、禄米プフリュンデ制の影響のもとで、すでに前もってレントエ生活者気質の方向へとやわらげられていた。しかしながら、ここから出て、市民的営利の倫理へのなんらかの移行を自力でなしとげることができなかった」（MWGI/20: 435-438）。

こうした認識は、ヴェーバーが主としてラートゲンから学んだものであり、日本近世の特殊な封建制が、近代的組織への移行を準備したという観点が提示されている。

(3) カール・ラートゲンの思想形成について

ヴェーバーの日本論に決定的な影響を与えたラートゲンについては、研究がほとんどすすんでいない。とくに、その生い立ちと成長過程については、先行研究が皆無である。そこで本研究では、彼の少年期と青年期について、直系子孫が保管している第一次史料（旅行記、父母から彼に宛てられた書簡類、ギムナージウムの通信簿など）に依拠して考証をおこなった。

ラートゲンはヴァイマル生まれであるが、1848年にデンマークに抗して樹立されたシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン臨時政府の法務大臣であった父の強い影響下で、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン人としての自覚を身につけるようになった。快活で行動的な子供だった彼は、1867年春にヴァイマルのギムナージウムに入学するが、おそらく入学直後に重度の偏頭痛体質が顕在化したらしく、半年後の9月までに退学し、その後1868年春までに、グンペルダのシャフナー学院に転入する。その後病疾が軽快した模様で、1869年春にヴァイマルのギムナージウムに復学するが、再度偏頭痛が激化し、1870年秋頃にふたたび退学する。そして療養も兼ねてシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン（ホフメングスタール）に滞在し、家庭教師のもとで学習に努め、そのさい、ハンブルク在住のジョージ・ミュラー＝ペーク（1854-1928）と知りあう。二歳年上のこの友人は、1879年に渡

日した後、長崎領事として勤務することになる。ミュラー＝ベークが、ラートゲンの渡日（1882年）にかんしてなんらかの示唆を与えた可能性がある。

ラートゲンは、1872年3月頃にヴァイマルに戻り、自宅で体調を整えた後、7月頃にギムナジウムに再々転入する。そしてその後は体調管理がうまくいき、また歴史に深い関心もち、1876年3月に大学入学資格を取得して修了するさいには、トップに近い成績を収めるにいたる。さらに、ヴァイマルの経済官僚である父の仕事に感化され、姉・兄や義兄グスタフ・シュモラーの歩みにも刺激を受けて、政治経済や、ドイツの当面する社会問題への関心を深め、またビスマルク体制への嫌悪感を露わにする。こうして、多感な20歳の青年は、やがて、大学での研鑽を通じて、しだいに法学から経済学へと立ち位置を変えていくことになる。

（４）カール・ラートゲンの後発資本主義論と日本論について

ラートゲンは、滞日中（1882～1890年）の日本史研究、日本財政史研究、日本経済動態研究によって、東アジア情勢と、そのなかにおける日本の位置について詳細な知見を得た。帰国後、ベルリン大学、マールブルク大学、ハイデルベルク大学における教育・研究活動において、日本にかんする研究を深める。とりわけ日露戦争（1904～05年）を契機として、日本の現状にかんして集中的に考究し、また発表する機会を得た彼は、日本の国民精神についても、まとまった考察を展開した。それは、とくに1906年夏学期の公開講義「日本人の文化」（毎週月曜日夕刻7～8時）において公にされており、これは、翌年公刊される『日本人の国家と文化』の原型だと思われる。

彼は、1907年秋にハンブルク学術財団によって招聘され、新たに開設されるハンブルク拓殖研究学院（Hamburgisches Kolonialinstitut und das allgemeine Vorlesungswesen）の経済学担当教授に任命される。この学院の正式な開学は1908年だが、すでに1907/08年秋学期の授業が開講されており、彼は、国民経済学一般理論と商業政策論のほか、「東アジアにおける国家生活と経済生活」と題した15回の講義案を学院に提出する。ところが、暑さのなか、授業準備と引越し準備に追われていた彼は、気管支炎のために倒れ、ハイデルベルク大学病院に入院する。

当初、10月30日に開始される予定だった「東アジアにおける国家生活と経済生活」は、結局大幅に圧縮されたかたちで、ようやく1908年1月8日に開講され、3月11日にいたるまで10回の講義が実施されるが、この圧縮のため、当初最終回に予定されていた「精神的・習俗的・社会的変容」をカットせざるをえなくなる。

1908年2月21日に、総合福音普及協会の招きで講演をおこなう機会を得た彼は、このカットした内容をこの講演において語ることにしたと思われる。こうして、「日本人の世界観」と題された講演が、聖ニコライ教会ホールでおこなわれた。

この講演において、彼は、現代日本人における祖先崇拜の根強い残存を論じ、これをカトリックと対比する。彼は、日本人の宗教的想念を、土着の神道と、伝来の仏教と、十八世紀以降における祖国宗教の興隆との混淆によって説明し、それが、資本主義と西洋科学の浸透によって揺らぎつつあることを指摘する。そして、いまや科学の検証に堪えうる国民統合理念が必要となっており、ドイツ・プロテスタントは、ここにたいして伝道を差しむけることができると彼は期待するのである（Rathgen 1908a, 1908b）。

（５）渋沢栄一の商業道徳論について

後発資本主義国における国民精神のありかたについて、実践面で考察しようとするさいに、重要な手がかりを与えてくれるのは渋沢栄一である。そこで、彼の著作と事績を調べているうちに、ひとつの重要資料を発見した。それは、帝国実業講習会講習録に含まれている『実践商業道徳講話』である。これは、1923年元日に語ったものに加筆して成立した講話で、3月1日に刊行されたと思われるこの年の『実業講習録』第1号から連載されたものである。今回入手したのは、1929～30年の『実業講習録』シリーズにおいて再刊されたものだと推定され、その雑誌版第19～24号（最終号）に連載されたものの合冊版である。各種ツールで検索したところ、ひとつもヒットしなかったため、国立国会図書館にも、他のどの公共図書館にも、どの大学図書館にも所蔵されていない稀覯本である。

この『講話』のなかで、渋沢は、道徳と商工業者の事業とが不可分であることを力説している。また、両者を結びつけるのが「真の知識」であることを強調し、両者を切りはなそうとする思想傾向をひとつひとつ入念に潰している。こうした立論は、彼の事業実践とともに、長年にわたる俗説との思想闘争によって育まれたものであろう。

道徳をもって身を律することは、渋沢にとって、損得を超えた問題であり、それは人間としての生きかたに係わっている。他人が投機行為をおこなうことには一定の寛容を認めしながら、自分自身は決してそれをおこなわないという姿勢に、とくにそれがつよくしめされている。たしかに、この『講話』は、「いかにして成功するか」という立身論の基調を崩してはいないが、「儲かればそれでいいのか」という渋沢の厳しい問いは、「精神」を喪失した末人たちの跳梁を激しく告発したヴェーバーの立論に通じている。

もちろん、渋沢は、さまざまな困難に直面

しつづ筋を通し、そのなかでみずからの立身出世を獲得する術を探っているのであって、ヴェーバーのように、近代資本主義の隘路に正対し、その閉塞状況を打破しようとしたのではない。ヴェーバーは、みずからの本分に誠実に取りくむだけではけっして事態は打開できないという透徹した認識をしめしていた。知に依拠し、本分に尽くして忍耐し、成功を期せと説く渋沢と、主知主義の病理を暴き、みずからの持ち分の外に立って闘争することを説くヴェーバーとの差異は歴然としているが、それでも、精神なき資本主義にたいして渋沢が抱いている危機意識は、1920年代の時代状況の一端をかなりよく捉えていると思われる。

(6) 本研究の意義

本研究によって、資本主義の《創出》と《伝播・波及》にかんするヴェーバーとラートゲンの研究が、相互裨益を通じて醸成されたものであることを解明した。しかも、特殊な歴史的「精神」が資本主義の《創出》をもたらしたという側面のみならず、資本主義の《伝播・波及》が、各国の国民精神に多大な変質をもたらしたという側面も判明した。《精神資本主義》というベクトルのみならず、《資本主義 精神》というベクトルもまた、ヴェーバーとラートゲンにとって大きな関心事であり、国民精神の再興という目的意識が、彼らの研究活動の根底に存していたのである。また、渋沢栄一にとってもまた、日本の実業界にはびこっている精神喪失（ニーチェの表現を用いるなら「未人」状況）を打破することが重要課題であった。そこには、資本主義と精神との《相剋》という重要な問題が横たわっていたのである。本研究によって、この点を剔抉することができたことが大きな成果である。

ヴェーバーやラートゲンの周辺の日本人たちの動向については、資料蒐集に努め、現在それらの整理・分析をすすめている。今後、この分析結果にもとづいて、独日の国民精神のさまざまな問題状況を解明し、それをヴェーバー・ラートゲン・渋沢の活動と関連づけ、また他の論者たち・実践家たちの活動をも考察することによって、独日の資本主義と精神とをめぐり問題への基本視座を固め、《近代と精神》という大きな問題の解明への道筋をつけることができよう。

〔文献〕

- MWGI/20: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. 1. Bd. 20. Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen; Hinduismus und Buddhismus; 1916-1920.* Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1996
- Rathgen, K. 1908a: *Die Weltanschauung der Japaner. Zweite Beilage zu Nr. 135 der*

- Hamburger Nachrichten* vom 22. Februar 1908, Abend-Ausgabe
- Rathgen, K. 1908b: *Die Weltanschauung der Japaner. Zweite Beilage zu Nr. 104 der Neuen Hamburger Zeitung* vom 2. März 1908
- Winckelmann, J. (Hrsg.) 1968c: *Max Weber, Die protestantische Ethik II, Kritiken und Antikritiken.* München u. Hamburg: Siebenstern Taschenbuch
- 渋沢栄一 1923 『実践商業道德講話』実業之日本社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

野崎敏郎「カール・ラートゲンの少年期と青年期 歴史のなかの自我形成と思想形成」(下)、*佛教大学社会学部『社会学部論集』*、査読なし、第54号、平成24年3月1日刊行、47～63頁

(http://archives.bukkyo-u.ac.jp/repository/baker/rid_SO005400001021)

野崎敏郎「資料の紹介と研究 カール・ラートゲン『日本人の世界観』」*佛教大学社会学部『社会学部論集』*、査読なし、第56号、平成25年3月1日刊行、115～130頁

(http://archives.bukkyo-u.ac.jp/repository/baker/rid_SO005600007386)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野崎敏郎 (NOZAKI, Toshiro)
佛教大学・社会学部・教授
研究者番号：40253364